

# 戦士

第6号

「戦士」編集委員会

- 中国共産党・中国政府・人民解放軍による学生・労働者虐殺という情勢に際会して
- 朝鮮の統一への態度・評価をめぐって

## 中国共産党・中国政府・人民解放軍による学生・労働者虐殺という情勢に際会して

6月4日、人民解放軍は天安門広場の武装制圧を強行し、無差別銃撃によって、多くの学生・労働者人民を虐殺した。こうした事態に直面して、この日本においても、中国人留学生在が各地で数百から数千人に及ぶ大規模な政治行動・虐殺弾劾行動に立ち上がっている。また日本人学生の中でも、これに注目し何らかの連帯行動を起こそうとする志向が広範に生まれている。

我々としても、学生共産主義者の組織と活動の建設を押し進め、新たなインターナショナル創建の事業に結合していこうとするものとして、最低限の義務を果たすべく、今回の事態への我々の態度を明らかにしておきたい。

### 1 今回の事態は何を意味しているのか

闘いは、胡耀邦の死去を契機に始まった。学生を先頭とした闘いは発展し、広範な労働者大衆も運動に加わり、そのスローガンも民主化要求から鄧・李体制打倒へと煮詰まっていた。しかし、闘争の政治的階級性格は必ずしも鮮明になっていない。学生から労働者へ、北京から全国へと急速に広がっていった闘いを、虐殺を免れ生き延びた活動家たちが、今日まで続いている。『活動家狩り』大量逮捕攻撃と闘争しながら、どのように総括し、どのように方向づけていくのか、我々は持続的に注目していかなければならない。

今回これほどまでの運動の高揚が生まれ、一大政治流動が現出した根拠には、商品生産・資本の生産力への屈服を深める中国共産党指導部の腐敗があることは明白である。多くの党官僚は自己の既得権益を防衛すべく、政治的保守主義に陥り、硬直した官僚主義支配の枠組にしがみついているのである。このことは、労働者・勤労大衆・学生の政治参加、国家統治の事業への参加、生産・分配・消費の管理・統制の事業への参加等を抑圧し、排除することに帰結せざるをえない。学生・労働者の闘いが、「民主化要求」という表現をとって立ち現れたこと

の根本にはかかる政治的現実が存在しているのである。

今後この「民主化要求」はいかなる方向へと進んで行くのか。それは、さらなる商品経済の導入、自由競争の全面化を基盤としたブルジョア民主主義へ向かうか、プロ独の事業への労働者大衆の全面的参加を実現していくためのプロレタリア民主主義へ向かうか、そのどちらかでしかありえない。といっても、もちろん、前者、すなわちブルジョア民主主義は、幻想のほかには、労働者大衆には何ももたらさしはしない。何らかのものをもたらすとすれば、それは、貧富の差の拡大、失業者問題、インフレ等の一層の進行の下での生活苦の増大（これは、今回の民主化運動への労働者大衆の参加を促した大きな要因となつてはいるわけだが）であり、現中国共産党指導部にとつてかわつた別の特権的な支配階層の新たな抑圧者としての登場である。したがって、遅かれ早かれ、後者、すなわちプロレタリア民主主義＝プロ独の再構築へと向かう以外には、労働者大衆の未来への展望は開かれてはこないのである。その際、この方向へと労働者大衆を導

## 2 帝国主義の反革命干渉弾劾！

米帝は一早く、民主化闘争を支持する姿勢を示し、中国政府を非難し、武器の禁輸を打ち出した。このことは、帝国主義者が、中国での民主化闘争（及び、それと結びついた党内闘争）を、中国の帝国主義秩序の側への一層

いていこうとする先進的な活動家には、かつて中国共産党が達着し、現指導部の登場とその下でのプロ独の後退を準備した、文化大革命の挫折＝世界革命にいかん貢献していくか、そのために自国における経済・社会建設をどのようなものとして進めていくか―に配慮、これを越えて進んでいくことが、鋭く問われざるをえない。

この間の一連の事態は、中国共産党・人民解放軍内の権力抗争それ自体に依拠できないことをはっきりと示している。この間の政治流動の中から、独自の共産主義の旗を掲げた、真に革命的な党を再建していく闘いを促進していくこと、このことが先進的・指導的活動家たちに突きつけられているのである。その中で、一般民主主義＝ブルジョア民主主義的傾向との分岐・政治的分解を押し進め、そうした傾向の影響・浸透を労働者大衆の中から一掃していくことは、現中国共産党指導部を根本的に批判し抜き、運動の確固とした前進を克ち取っていくために不可欠の課題である。

の屈服のために利用できると判断していることを示すものである。逆に言えば、民主化闘争の政治的未分化が帝国主義者に介入の隙を与えているということの意味している。

我々は彼ら帝国主義者のとる態度の意味を暴露し、弾劾しなければならぬ。彼らは決して自由や民主主義の理念から自らの態度を決定しているわけではない。専ら自己の利害の防衛と拡大のためのリアリズムをもって自己の態度を決定しているのである。米帝は一体これまで何百万・何千万の人民！無防備・無抵抗な人民を大量に含めて―を虐殺してきたことか！

また経済制裁については慎重に検討し、日本・西欧諸国の動向を牽制しているが、これは、この間の中国市場をめぐる資本間の競争の中で、いかに自国が不利にならないようにしながら、政治流動への介入をより有効なものにしようか、という策略を練り上げている姿に他ならない。

## 3 “干渉主義反対”を掲げた、帝国主義的干渉の補完者―日本共産党弾劾！

日頃、干渉主義「反対」を党是としている日本共産党が、中国での事態を、人権問題であり、干渉主義にはならぬといふご都合主義をもって、中国共産党を非難している。そして、今回の中国での事態に関して慎重に言葉を選ぶ日帝政府に対し、強い態度を取ることを要求している。すなわち彼らは、日帝政府になりかわって、帝国主義的干渉者として立ち振る舞っているのである。

というのも彼らの批判の本身は、米帝ブルジョアジーと同様の一般民主主義＝ブルジョア民主主義の観点から

一方日帝政府の態度は、きわめて欺瞞的である。すなわち「かつての侵略という歴史的経緯」などを持ち出して、今回の事態に対して慎重な態度を見せている。しかし彼らに侵略への反省などは全く存在しない。今日にも続いている在日朝鮮人・朝鮮民主主義人民共和国への差別・敵視政策を見よ！

今回の事態への日帝政府の対応に現れているものは、彼らなりの損得勘定・現実判断以外のなにもでもない。すなわち、日帝資本にとつての、商品市場・資本投下先としての中国の巨大な可能性であり、また急速にその方向へと進展している現実である。日帝政府の欺瞞に惑わされることなく、我々はこうしたことをはっきりと見抜いておかなければならない。

のものにすぎない。彼らはこれに「社会主義的民主主義」の衣をかぶせてはいるが、意味していることは同じことである。結局彼らが問題にしているのは形式にすぎない。しかしプロレタリアートにとつて重要なのは実質であり、ブルジョアジーを打倒し、資本主義・商品経済をねこそぎにし、新たな生産・分配・消費を作り出す事業へと労働者大衆を全面的に参加させていくための民主主義である。プロ独の旗を降ろして久しい日本共産党には、もはやこうしたことは理解できようはずもないであろう。し

たがって、彼らは右派・反動ジャーナリズムの反共宣伝の前に、自己を民主主義一般の擁護者としてしか登場させえず、屈服しているのである。

日本共産党のように、一般民主主義の見地から、今回の中国での事態への態度を決定することは、広範に起ち

#### 4 国際プロレタリアートの共同の事業を押し進めよう！

今回の中国における事態は、我々帝国主義国のプロレタリアート・人民に何を突きだしたのであるか。このことをしっかり見据え、このことに応えていく活動をこそ進めていかなければならない。

まず我々にとって最低限の前提として、次のことを押えておかなければならない。それは、自国帝国主義打倒の旗をしっかりと掲げているのか否かを確かめることである。と同時に、国際帝国主義の侵略・反革命、そのための種々の干渉を暴露し、これと闘争することである。これによって、「民主主義」の装いを身につけながら、反革命干渉を行おうとする帝国主義者との間に、鮮明に分界線を引いておくことが、是非とも必要である。

さらに、このことの上に、共産主義運動の長い国際的な混迷を突破していく位置に自らを立たせること、この方向へと、一歩でもさらに足を踏み出していくことである。今日の中国共産党の否定的状況を準備したものは、決して、「一国社会主義の腐敗」や「一国社会主義の必

上がった中国の人民を、帝国主義への屈服と隷従の沼地へと引きずり込む役割を果たしかねないものである。我々があらためて日本共産党を弾劾しなければならぬ根拠は、ここにある。

然」といった決まり文句でナデ切ることで済むものではない。彼らが逢着したことの本質は、全世界を覆っている商品生産と、世界的に決定的な支配を獲得している資本主義的生産関係を、より高度な社会的生産様式へと取って変えていくこと、そのための能力をプロレタリアートに獲得させていくことである。もちろんこのことを一国的な枠内で展望することは現実的に不可能である。これは国際プロレタリアートの共同の事業としてのみ引き受けていくことができる課題である。問われているのは、ここにおける展望を指し示していくことである。これを回避して、中国プロレタリアートとの団結を創出し、発展させていくことはできない。

天安門広場の虐殺を一大頂点としたこの間の政治流動の中から、共産主義運動の混迷を突破する国際プロレタリアートの階級形成の事業を一歩でも前進させていくこと、そのための条件を見つけ出し、押し広げていくこと、ここにこそ全ての活動家の意識性を集中していかなければならない。

ばならない。

すでに述べてきたように、「民主化要求」という形で現れた中国人民の闘争はいまだその階級の性格は未分化である。したがって民主化闘争全体に対して、「革命的」か「反革命的」か、という規定を与え、それによって自己の態度を決定しようとする試みは無意味なものではない。

そこには、帝国主義者のごとく明確に反革命の意図をもって介入している部分が存在し、またこれと結びつくことで展望を見いだそうとする部分もまた少なからず存在していることは疑えない。だから、我々帝国主義国のプロレタリアート・人民が、中国共産党・中国政府への弾劾を一般的に語ることに、「人権」あるいは「人道的」見地なるものを自己の立場とすること、このことは帝国主義政治に客観的に加担するものとならざるをえない。とりわけ日本帝国主義政府に対し、中国政府への制裁を要求することは、帝国主義国を「民主主義国」であると美化し、反共宣伝を繰り広げるブルジョアジーに武装解除し、彼らと同じ政治的基盤に自己を位置させることを意味するものである。これは、中国人民の闘いを帝国主義秩序の側に引き寄せる役割を果たしこそすれ、決して彼らの闘いを革命的な方向に向かわせるものになりはし

ない。

また、民主化闘争全体を「革命的」とすることはできないということ、「民主化要求」として現れた中国人民の闘いに革命の見地から接近し結合することはできないということとは、全く別物である。むしろ、流動する事態に対し可能な限り、革命的な側から介入し、帝国主義者やその追隨者の反革命介入と断固闘争することは、絶対に必要なことである。そのことを通して、中国人民の闘いが階級の成長を遂げて進んで行くことを支持し、そうした方向を促進するためにこそ結びつき、現中国共産党指導部と分岐した中国プロレタリアートとの革命的団結を戦い取る条件を拡大していくことを、目指していかなければならない。

我々に突きつけられているのは、このことであって、ほかのなにもでもない。中国共産党の虐殺を弾劾し、中国人民の果敢な闘争に結びついていこうとする志向を、真に積極的で有意義なものとするために必要なことは、決してここから目をそらさないことである。目をそらすとすれば、それは、中国プロレタリア人民の階級闘争にとって、否定的で、意義のないものにならざるをえないであろう。

## 朝鮮の統一への態度・評価をめぐって

この間、韓国での労働者人民の反帝・独裁打倒の闘争において、統一のスローガンが前面に掲げられてきている。それだけではなく、統一を促進していくための、さまざまな形での「北」との直接交流に向けた試みがなされ、盧泰愚政権との鋭い攻防・対立を形成している。朝鮮の統一への評価と態度を明らかにしていくことは、日朝連帯の運動を構築していくとする日本のプロレタリアート人民にとって、欠かすことのできない課題となっている。

この課題に応えていくために、ここでは、共産主義研究会の機関紙「大道 第40号」掲載の「朝鮮侵略粉碎・朝鮮人民連帯の闘いに於いて「韓国」の呼称は正しいのか!?」（東方信生）以下、東方論文と略一の、朝鮮の統一問題に言及している部分を取り上げ、これへの我々の批判的見解を示していくことにする。というのは、日本のプロレタリアートの側から朝鮮の統一への態度・評価を明らかにした主張が多くない中で、この論文は、一定ふみこんで独自の視点を提出しているものと判断するからである。なお、共産主義研究会は、今日の青年共産主義者同盟（準）へ至る潮流の70年代前半から後半にかけての組織である。ただし、この論文の位置や、今日的な路線的継承関係を正確に把握しえていないため、ここでは、あくまで独自の見解を提出している個人論文として扱うことにする。

### I

以下、ここで検討する主要な部分を、東方論文から抜粋して紹介しておく。

南北朝鮮は、一方は、米帝の支配のもとで従属資本主義として発展し（もつとも、李承晩の時代には典型的な植民地経済であったが）、他方は、社会主義建設へと向ったのである。こうして朝鮮民族は、地理的に分断されるだけではなく、社会体制をも全く異にする二つの国家として分断され、そうした状況が固定化されることになったのである。

このことは決定的に重要な変化である。  
第一に、このことは、南朝鮮に於ける階級闘争が、韓国なのか、共和国なのかというかたちで展開するもの、即ち、共和国の一部として南朝鮮を解放するという「反帝・民族民主主義」革命の歴史的条件が存在しなくなったことを意味しているのである。

第二に、それは朝鮮半島に於ける民族問題がすぐれて特殊なものとなったことを意味している。即ち、南朝鮮には、民族解放という歴史的課題が残されているものの、共和国にはその課題が基本的になくなったということである。何故ならば、共和国はどのような

外国勢力の制圧のもとにもなく、しかも決定的なことは社会主義への過渡期「プロレタリア独裁」に入ってしまったということである。だから、民族問題は、共和国では歴史的阶段として、社会主義建設のための不可欠な「歴史的にとびこえることのできない課題として存在しているわけでは決してなく、今度は、プロレタリアートの解放という社会主義のための課題が主要なものとなったのである。従って、南朝鮮の解放は、北朝鮮に於いて国家となった労働者階級にとっては、民族問題の解決として北朝鮮自身の民族としての立場から問われるものではなく、朝鮮半島全体の社会主義革命の不可欠ではあるが、あくまでも従属の一環として存在するということであった。そして、その際に、共和国人民の民族意識「民族的統一の要求（それは自然発生的に存在するものである）」は、社会主義朝鮮のためのあくまでも従属的な位置と性格をもたなければならぬものである。

他方、南朝鮮人民にとっては事態は全く異なっている。米帝の李政権による支配は、五〇年代を通じて反帝民族民主主義の闘いを求めていた。従って、民族民主主義革命は当時において正しいものであった。だが、その民族民主主義革命は、全朝鮮民族の課題として実践にのぼされていたのではなく、南朝鮮の労働者・農民を始めとする南朝鮮の民族的課題として存在していたのである。そして共和国にとっては、その南部の闘いを断固として支持し、援助すべきものとしてあった。

だが、朝鮮労働党の政策は、こうした事情を正しく理解したものではなかった。「祖国の民主主義的統一と完全な民族的独立を達成しなければならぬ全民族的な任務がそのままのこざれています。」「全国的にみて反帝反封建民主主義革命の段階にあり、」：△中略▽：（五年・金日成）という具合に、朝鮮の分断という事実を見据えず、民族主義的な誤りに陥っていたのである。既に、民族問題―矛盾は、全朝鮮民族にとって一様な社会的性格と意義を失っていたのであり、そうした点を正しく理解せず、全朝鮮革命の課題として反帝反封建民主主義革命を指定したこと、言い方を換えれば、共和国を「解放区」と見たてた革命を考えたこと、この点に誤りがあったのである。：△中略▽：つまり、朝鮮半島全体にわたる革命が反帝反封建民主主義革命であるというのは誤りなのであって、二つに分断された社会と国家とを前提とするかぎり、二つの異なった種類の革命として存在しており、社会主義朝鮮として南北を貫く労働者階級の指導のもとで統一されていくものに他ならなかったものなのである。

Ⅱ 「南朝鮮には、民族解放という歴史的課題が残されているものの、共和国にはその課題が基本的になくなったということである。」はたしてそうであろうか。朝鮮民族にとって全体として「民族自決権」を奪われているであり、その結果として民族の分断があり、そのようなものとして―すなわち歴史的に強制されてきたものとして―各々の国家形態が存在しているのではないのか。朝鮮北部に在住する人民が実質的に北半分を「領土」とする国家形態をとることを余儀なくされていることが、共和国の朝鮮人民にとっての民族抑圧としてあるのではないのか。その意味において、朝鮮民族全体にとって、民族問題は未だ解決されていないといわなければならないのではないのか。東方論文は、民族抑圧を帝国主義の直接的支配に一面化する誤りに陥っていると云わなければならないまい。

朝鮮民族が歴史的に被抑圧民族の位置に置かれ、その中で、民族的分断を強制されてきた以上、民族統一の要求が絶えず再生産されてくるのは必然である。（もちろんこのことは、在日朝鮮人においても同様である。それは単に本国が分断されているというだけでなく、そのことに規定され在日朝鮮人社会の分裂という形でも貫徹している以上、彼らとの連帯を考えていく上で、是非ともふまえておくべき前提である。ここではこのことの指摘

にとどめておく。）また、彼らの自主的な統一の要求が、帝国主義との闘争において一定の積極的性格をもつことも明らかである。したがって、朝鮮のプロレタリアート・共産主義者にとって、この民族統一の要求を正しく取り上げ、応えていくことは、階級闘争の発展を克ち取っていく上で、前提的な課題としてとわれているのである。また、朝鮮人民の闘いに連帯し、彼らとの団結を勝ち取ろうとする日本のプロレタリアート人民にとって、日本帝国主義の朝鮮支配・民族抑圧の歴史、分断固定化への加担を弾劾すると同時に、朝鮮の自主的統一に向けた闘いを支持することは、抑圧民族の側に位置している日本の労働者大衆の排外主義意識と闘争するために、最低限の義務である。

東方論文は、民族抑圧を帝国主義の直接支配に一面化する一方で、こうしたことを、アイマイにしてしまう結果になっているのではないだろうか。

Ⅲ ①このように民族問題を一面的にとらえる結果をもたらしている根拠には、スターリン以来の、△民族的課題としての民族民主主義革命▽△プロレタリアートの課題としての社会主義革命▽という「二段階戦略」的発想、さらにそれに基づいて、北朝鮮では社会主義革命が第一義、南朝鮮では民族民主主義革命が第一義、という図式が存在しているようである。

それは、たとえば「民族問題は、共和国では歴史的段階として、社会主義建設のための不可欠な―歴史的にとびこえることのできない課題として存在しているわけでは決してなく、今度は、プロレタリアートの解放という社会主義のための課題が主要なものとなったのである」といった主張に典型的に表れている。この主張を裏返せば、「韓国では、プロレタリアートにとっても民族民主主義革命という民族的な課題が主要なものとしてある」ということになる。つまり、東方論文では、社会主義と民族問題の相互関係を、プロレタリアートの階級的観点から一元的にとらえることに失敗しており、各々を二元的にとらえた上で、北朝鮮では前者が主要なもの、南朝鮮では後者が主要なもの、という具合に、図式的に整理することですませてしまっているのである。

これは、金日成が、スターリン派に共通する「二段階戦略」をもって、朝鮮の革命を「全国的にみて反帝反封建



民主主義革命の段階にあり……とする混乱した主張を見せていること、実は同質の欠陥である。東方論文は、「二段階戦略」―革命へと至る特定のみちすじを指定することを「戦略」とする戦術観へと批判を切り込ませえず、北と南を機械的に切り離すことによって、北は社会主義の段階・南は民族民主主義革命の段階という図式を導入することに「成功」しているにすぎない。

しかし、北朝鮮に在在する人民にとっても民族的課題は必ずしも終わっていないと同時に、南朝鮮に在在するプロレタリアートにとっても民族的課題を、階級的観点から、共産主義的観点から、取り上げていくことが問われているのである。

②東方論文は、この点に関連して、次のように述べている。すなわち、「南朝鮮の解放は、北朝鮮に於いて国家となった労働者階級にとつては、民族問題の解決として北朝鮮自身の民族の立場から問われるのではなく、朝鮮半島全体の社会主義革命の不可欠ではあるが、あくまでも従属の一環として存在する」「共和国人民の民族意識―民族の統一の要求は、社会主義朝鮮のためあくまでも従属的な位置と性格をもたなければならぬものである。」

ここで見ておかなければならぬことの一つは、「従属的」ということの意味をどのようなものとして考えるのか、ということである。東方論文では、民族問題と社

③見ておかなければならぬことのもう一つは、「共和国人民の民族意識―民族の統一の要求は、社会主義朝鮮のためあくまでも従属的な位置と性格をもたなければならぬ」というのであれば、では南朝鮮人民の民族意識―民族の統一の要求は、「社会主義朝鮮のためあくまでも従属的な位置と性格を」もたなくてもよいのか、南朝鮮プロレタリアートは、朝鮮の民族的課題を階級的観点からではなく「民族としての立場」なるものからとらえなければならぬのか、ということである。

南朝鮮のプロレタリアートにとつても、あくまで社会主義革命・共産主義革命の事業が第一義である。もちろん、このことは当時の韓国においてプロ独権力の樹立を掲げるべきであるとする主張に直結しない。そうではなく、なにかしらの超階級的なものとして民族解放民主主義革命があつて、プロレタリアートの独自の階級闘争、社会主義・共産主義のための闘いが、そのさきに初めて立ち現れてくる課題としてあるわけではない、ということである。社会主義・共産主義を準備すること、そのための主体的客観的条件を拡大すること、このことがあらゆる民主主義闘争に貫かれなければならないし、例え当面する権力問題として民主主義革命が日程に上っているときにも、ブルジョアジーに追隨する位置にプロレタリアートをつかせるのではなく、あくまで「特定の理想のための特定の闘い」を担い抜くものとしてプロレタリアー

会主義を二元的にとらえた上で、どちらが「主」で、どちらが「従」かとする図式的枠組から考える傾向から自由でないことは、先に見たとおりである。

「南朝鮮の解放は……北朝鮮自身の民族としての立場から問われるものではなく……」としながら、一方で「共和国人民の民族意識……」という具合に語られているのは、朝鮮の現実を、図式的枠組にあてはめ整理しようとすることから生じてくる混乱ではないだろうか。共和国プロレタリアートは、確かに勤労大衆の民族意識―民族の統一の要求の自然発生性に拝跪してはならない。拝跪するのではなく、共産主義革命の側から民族的要求を取り上げ、止揚の方向性を提示することがとめられるのである。

そのためには、朝鮮半島北部における社会主義的な生産・労働を組織する事業を、朝鮮半島全体での社会主義建設の事業の実現という位置からとらえ返すことが必要である。またそうした位置から、朝鮮半島南部における反帝・独裁打倒闘争を援助し、闘いの結合を強める中、南北を貫くプロレタリアート独自の緊密な団結を創り出していくことが不可欠である。そうした闘いの基盤の上でこそ朝鮮の統一を現実的なものとして展望していくことができるであろう。そしてさらに、これらのことを、より広い見地から、すなわち世界的な革命事業全体を前進させていくという見地からとらえ返すこと、がなされなければならない。

トの自覚と組織を打ち鍛えていくこと、そのようなものとして、民主主義革命を断固として領導していく位置にプロレタリアートをつかせていくこと、がもたらされてこざるをえないのである。民族解放民主主義革命の遂行が、なにかしらの超階級的な平板な民族的事業としてあるわけではない。そうではなく、その内部に不断の階級分化・葛藤がはらまれているのであり、そこにおけるブルジョアジー・小ブルジョアジーとの党派闘争を勝利的に展開すること、そのことを通して、プロレタリアートの民族解放民主主義革命におけるヘゲモニーを強めていくこと、が問われているのである。

すでに民族解放運動の歴史が示しているように、民族解放運動の発展は、不可避にその内部における階級的政策的分化とそれにもなう諸矛盾・軋轢を生ぜしめる。そしてその内部から、帝国主義に対して融和的な部分、反革命に転化する部分が、しばしば生み出されてくる。また、一端の政治的独立を戦い取ったとしても、帝国主義はその圧倒的な資本の力をもって、経済的な従属の下につなぎとめ、そのことの上に政治的独立を形骸化し、新たな形で民族的抑圧の構造を作り出してきている。

民族解放を徹底的に押し進めること、そのために帝国主義に対する断固たる首尾一貫した闘争を組織し抜くこと、このためには、帝国主義の基礎としてある資本主義と非和解的に対立する階級としてあるプロレタリアートが、闘いの前衛として登場していくことが重要である。

プロレタリアートは、自己を運動の領導者へと不断に高め上げ、そのもとに広範な貧農・勤労大衆等を引き付けていくことをとおして、その責務を果していくことが問われているのである。

したがって、南朝鮮プロレタリアートもまた、決して「民族としての立場」なるものに、自己の階級性を溶解させてしまうことなく、帝国主義と闘争しぬく階級として自己を形成していくことをとおして、帝国主義の民族的抑圧、反革命介入と闘争すると同時に、北朝鮮プロレタリアートとの結合を闘い取り、そうした闘いの基盤の上に朝鮮の統一を促進し、民族問題を解決していく前衛として、「民主主義の先進闘士」として、登場していくことが問われているのである。ここにおいて、南朝鮮のプロレタリアート・先進的活動家にとって、共和国、およびそこでの指導党派たる朝鮮労働党の路線を検討し、態度を明確にしていくことは、避けることのできない課題である。統一運動の前進は、この課題を、ますます鋭く、彼らの前に突き出さずにはおかないであろう。

要求・自然発生性に、共産主義革命の側から結びつき、応えていくことが可能となるのであり、ここに朝鮮プロレタリアートにとっての困難の核心の一つがあるのだ。(なお、朝鮮の統一がプロ独・社会主義革命の下でのみ可能であると主張はどうであろうか。東方論文にもある通り、民族の統一自体は、ブルジョアの課題である。問題はここにおいて、プロレタリアートがイニシアティブをとることであり、そのことを「統一はプロ独の下でのみ可能」と表現するのは、一面的なだけでなく誤っている、と言わなければならないまい。)

以上のことからして、朝鮮の自主的統一を支持する日本のプロレタリアートにとって、たとえば「民族解放—社会主義革命連帯」「民族解放—プロ独連帯」というスローガンをもって、朝鮮人民の闘いに結合していくこととするこの限界も明らかであろう。問われているのは、そうした「みちすじ」ではなく、朝鮮プロレタリアートは、まさに社会主義建設と民族解放闘争の今日的な結合の問題に突き当たっているのである。単に未来への展望—みちすじとしてではなく、当初から現実直面するものとして社会主義・共産主義の内容が問われているのである。

したがって、共産主義革命—それは世界的な事業として存在している—を実現していくために国籍・民族に左右されないプロレタリアートの国際的統一を今日的に創り出し、発展させていくこと、こうした見地から、朝鮮

東方論文も指摘するように、南北分断状況に規定され、朝鮮には、北における社会主義的な生産・労働を組織する事業と、南における反米反帝・独裁打倒の闘い、という性格の異なる二つの課題が同時に存在している。

しかし、だからといって、「50年代の南朝鮮の解放は、反帝民族解放民主主義革命と更にそのもとで発展転化するプロレタリア独裁の下でのみ南北統一を達成し、従って、社会主義革命のなかで、それ自身はブルジョアジーの支配と矛盾することのない民族の統一という民族問題を解決」というみちすじを措定し、そこから朝鮮人民の民族統一の要求を「この一連の革命の過程を促進させる要素としてあることは全く疑いない」というレベルで把握するのはどうであろうか。このような、「みちすじ」の提起では、朝鮮の広範な労働者大衆の統一の要求をとらえることはできないであろう。必要なのは、性格の異なる二つの課題を結合させていくことであり、そこにおける朝鮮プロレタリアートの統一した指導性を創り出していくことである。そして、そのためにプロレタリアート自身が、南北という分断国家としての枠組を超えた独自の結合を、当初より「社会主義朝鮮」—さらには世界的な革命の事業—を準備する質において創出していくことにより、身をもって、統一の展望をさし示していくことである。こうしたことによつてこそ、朝鮮統一の

プロレタリアートが南北分断を突き破る結合を克ち取っていくことを支持すると同時に、日朝プロレタリアートの緊密な団結を構築していくことを目指していかなければならない。そのために、朝鮮プロレタリアートが逢着している課題を、共有し、共に突破していく位置に自らを立たせること、またそれと不可分のものとして、世界的な革命事業に参加し、これを促進していくための自己の課題、帝国主義本国人民としての日本プロレタリアートの責務—帝国主義本国資本の収奪—をはたしていく闘いを前進させていくこと、こうしたことに何としても応えていかなければならない。



